

日本女子大学大学院学生特別研究奨励金 成果報告書

2018年 4月 3日

期 間	2017年度（29年度）	配分額	100,000円
よみがな	はまだ みえこ	在籍研究科・ 専攻・学年	文学研究科・ 日本文学専攻・博士課程3年
氏 名	濱田 美枝子		
指導教員の 氏 名	山口 俊雄	指導教員の 所属学科・職	文学部日本文学科・教授
研究課題名 ※40字以内	歌人五島美代子研究——文学史における位置付けの試み——		

1. 研究成果の概要

当該研究の概要を400字程度で簡潔に記述してください。（様式変更・追加不可。以下同様）

歌人五島美代子は、文学史上、「母の歌人」「母性愛の歌人」と称される場合が多いが、これらは、〈母性愛〉は母の子に対する本能的なもの、という近代に言語化された母性愛観の枠組みに立つものである。しかし、美代子の〈母の歌〉の解明には、美代子の母から4代に亘って営まれてきた精神的土壌と生命の円環という観点からより精緻に究明することが必須であると考える。

さらに、社会的・芸術的視点から美代子の歌の表現世界の分析をより深めなければならない。これによって短歌史上における歌人五島美代子についての真価を示す位置付けを論じることを目的とする。

この目的達成のため、今年度は、美代子の歌の表現形式の特徴について〈律〉の観点から全歌集に亘っての分析を試み、心象世界を表す歌ことばとの関係性について考察した。

2. 今年度の研究報告

図表も含めてよいので、以下の①～③についてわかりやすく記述してください。

- ① 研究の目的
- ② 研究の方法
- ③ 研究成果・今後の展望

①研究の目的

歌人五島美代子は、「母の歌人」「母性愛の歌人」と称される場合が多いが、これらは、〈母性愛〉は母の子に対する本能的なもの、という近代に言語化された母性愛観の枠組みに立つものである。採択者は、〈母と娘〉の問題を、美代子の母から五島家4代に亘って営まれてきた精神的土壌と生命の円環という観点からより精緻に究明し、〈母の歌〉の内実を明らかにすること、また、社会的・芸術的視点からも美代子の歌の表現分析をより深めることによって、短歌史上における歌人五島美代子の真価を示す位置付けについて論じることを目的とする。

②研究の方法

【研究計画①】 〈母の歌〉の内実を明らかにすること

○《急逝した長女ひとみの死をめぐる〈母の歌〉について》

ひとみの死を巡る〈母の歌〉の表現世界の内実を探る。特に、第3歌集『炎と雪』（1952年3月）や第4歌集『風』（1950年10月*第3歌集は第4歌集の後に刊行された）、及び第5歌集『いのちありけり』（角川書店、1961年6月）を中心に分析、考察する。

○《「美代子と孫ゆかり」の関係性について》

次女いづみとの〈母と娘の確執〉の表現世界を第6歌集『時差』（1970年7月）を中心に分析、考察する。

○《孫ゆかりの存在が美代子の創作に与えた影響（〈孫恋〉の世界）について》

分析及び考察を試みる。

【研究計画②】 美代子の歌の表現分析をより深めること

○《〈律〉の観点から美代子の歌の形式の分析を試みる。》

美代子の歌の表現形式の特徴について『定本五島美代子全集』所収の全歌についての分析を試みることで、心象世界を表す歌ことばとの関係性について考察を試みる。

今年度の研究報告（つづき）

③研究成果・今後の展望

【研究成果】

概ね申請当初の計画に即して研究を進めることが出来た。以下、上記「②研究の方法」に即して研究成果を述べる。

①〈母の歌〉の内実を明らかにすること

「美代子と母千代植」・「美代子と娘ひとみ」・「美代子と孫ゆかり」の五島家4代に亘る近代家族の持つ血の系譜への願望が、美代子の表現世界をどのように構築しているかについて、第3歌集『炎と雪』、第4歌集『風』、第5歌集『いのちありけり』および第6歌集『時差』について検討し、私的に論文をまとめることが出来た。今後発表の機会を得たい。

②美代子の歌の表現分析をより深めること

美代子の歌の表現形式の特徴について『定本五島美代子全集』所収の全歌集について音数律の分析を試み、美代子の各歌集における破調の比率の推移と定型を基調とした破調の特徴を分析した。

『暖流』前期は、48%、続くプロレタリア短歌期には、100%が破調。『暖流』後期は文語を多用して「定型破調」で歌を作り、破調の比率は84.1%であった。第2から第6歌集では70%台を示し、晩年、『垂水』では81.6%、『花激つ』では86.4%もの歌が「破調」であることが分かった。美代子は、「破調の歌人」と言うことの出来る歌人であることが実証できた。

それでは、なぜ破調が多いのか。

この点について、〈生活短歌と伝統的短歌世界の止揚〉の観点から、〈破調〉と自己が作り出す歌ことばとが密接に繋がり、現代に通じる美代子独自の斬新な〈調〉が生まれたことを論証した。

上記の分析と論証は今までなされていないことを踏まえて、採択者は、「平成29年度 和歌文学会第63回大会」に於いて、「歌人五島美代子の表現形式——定型の超克と新しい律への飛翔」と題して口頭発表を行った。

【今後の展望】

次年度は、以下の課題について成果を上げること为目标とする。

- 今年度の【研究計画①】に則って私的にまとめた論文について、発表の場を得る。
- 採択者が所蔵している未発表資料の整理、翻刻及び発表を試みる。
- 美代子の生みだした歌ことばの生成過程についての詳細な検討を試みる。
- 第7歌集『垂水』及び最終歌集『花激つ』の意義についての論究を進める。

3. 成果発表（投稿中も含む）

研究経過・研究によって得られた成果を発表した①～②について、該当するものを記入してください。ない場合は「なし」と記入してください。

①雑誌論文、図書（著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ）

②学会・シンポジウム等での発表（会名、開催日、開催場所）

①雑誌論文、図書

なし

②学会・シンポジウム等での発表

- 濱田美枝子 「歌人五島美代子の表現形式——定型の超克と新しい律への飛翔」
「平成29年度 和歌文学会第63回大会」、2017年10月22日、於宮崎市民プラザ

※この報告書はホームページで公表されます。

採択者氏名

濱田美枝子

日本女子大学大学院学生特別研究奨励金 成果報告書

2017 年 04 月 02 日

期 間	2017年度(29年度)	配分額	10万円
よみがな	りなな		
氏 名	李娜娜	在籍研究科・ 専攻・学年	文学研究科・ 日本文学専攻・D3年
指導教員の 氏 名	山口俊雄	指導教員の 所属学科・職	日本文学科・教授
研究課題名 ※40字以内	武田泰淳の中国観－「富士」を中心に－		

1. 研究成果の概要

当該研究の概要を400字程度で簡潔に記述してください。(様式変更・追加不可。以下同様)

「富士」(1969)は戦争末期に富士山麓の大病院で起きた出来事を書いた物語である。本研究では「富士」の「死」の内容を分類し、幼児の虐殺と戦争との関係を考察した。このような作業を通して、70年代、泰淳の日中戦争に対する認識の究明を試みた。

だが、研究の過程で彼の戦争体験、特に上海で働く時期の経験に対する理解の不十分さに気づいたため、当初の研究課題に修正を入れ、敗戦直後、戦争体験を踏まえて書かれた「虻のすえ」(1947)を取り上げた。この研究では、日本精神を提唱していた軍宣伝部の辛島と主人公の杉との関係を論じた上で、1945年前後、戦争に参加した文学者に対する泰淳の認識を究明した。

「虻のすえ」は中国、日本軍、日本の文学者に関する戦争の前線の作品で、「富士」は日本、国民、狂気に関する戦場の後方の作品である。「虻のすえ」から「富士」まで20年間隔たっているが、「武田泰淳の中国観」という大きな研究目標について齟齬はない。

2. 今年度の研究報告

図表も含めてよいので、以下の①～③についてわかりやすく記述してください。

- ① 研究の目的
- ② 研究の方法
- ③ 研究成果・今後の展望

① 研究の目的

研究の目的

今年度は、「富士」の研究は具体的に以下の2点の遂行を目的とした。

- ① 「富士」に書かれている「死」を分類する。
- ② 幼児の虐殺と戦争との関係を考察する。

研究の方法

上記「研究目的」について、「富士」を研究する時に、以下の研究方法を取った。

- ① 「富士」を精読した上で、小説に書かれた「死」は、「戦死」、「自殺」、「餓死」、「虐殺」に分けられることを明らかにした
- ② 何の罪もない子供が子守りによって虐殺される内容を取り上げ、日中戦争が日本国民に与えた影響を考察した。

70年代、泰淳の日中戦争に対する認識を考察する時に、泰淳の戦争体験をより全面的に把握するために、『上海1944-1945-武田泰淳『上海の螢』注釈』を照らし合わせ、上海で働いた時期の泰淳の経験を振り返った。「上海の螢」の「私は汪主席が好きだった」という言葉から、作者が上海で働いた時期に、中国人と違う日中戦争認識を持っていたことに気づいた。70年代の泰淳の戦争認識を考察する前に、敗戦直後の泰淳の戦争認識について、具体的な内容とその特徴を明らかにする必要があると考えた。それゆえ、「虻のすえ」の研究をさらに深く行った。

「虻のすえ」の研究は具体的に以下の4点の遂行を目的とした。

- ① 辛島の日本精神に対する態度の変化を明らかにする。
- ② 辛島の暗殺による死と彼の生まれ変わるといふ発言の意味を究明する。
- ③ 辛島に対する杉の態度の変化の原因を究明する。
- ④ 敗戦直後、泰淳の戦争責任に対する認識を検討する。

研究の方法

上記「研究目的」について、「虻のすえ」を研究する時に、以下の研究方法を取った。

- ① 「虻のすえ」の中で、辛島は戦争中軍の宣伝部に働き、日本精神がないやつは売国奴だという演説を行った。だが、戦後、日本精神がなくても生きていけると発言した。この変化を考察するために、『帝国陸軍編制総覧 第2巻』(芙蓉書房出版 1993年)を参考し、宣伝部の陸軍組織における位置と仕事内容を確認した。
- ② 彼は暗殺されたが、辛島は彼のような人種が生まれかわってくると予言した。この食い違いを考察するために、彼の死を仏教の因果応報の角度、すなわち「生まれかわってくる」ということは「精神」の不滅を意味するのではないかという角度から分析した。
- ③ 戦中、杉は権力を憎んだが、戦後は辛島の個性を憎むようになった。この変化を考察するために、泰淳が上海で中日文化協会に勤めていた経験を踏まえ、彼は戦中支配者の立場であったが、戦後に支配される立場になったことから、泰淳の分身と言われる杉の困惑を考察した。
- ④ (誰の)戦争経験から泰淳の戦争責任に対する認識を考察した。「虻のすえ」より早く出版された戦争と関係のある小説「廬州風景」、「審判」を取り上げ、「虻のすえ」と比較してみた。戦場における直接的な殺人が書かれていた「廬州風景」、「審判」と違い、「虻のすえ」は、「彼女」が実際の戦闘に参加しなかった人間の心にも恐ろしい狂いを生み出していたと考察した。

今年度の研究報告（つづき）

② 研究成果・今後の展望

〈研究成果〉

以下、上記「研究の方法」に即して「富士」の研究成果を述べる。

① 日中戦争は、日本が中国を侵略した戦争である。この戦争は、前線の中国の人民と後方の日本の国民に莫大な被害をもたらしたことが、精神病院で起きた「死」の事件、特に幼児の「虐殺」から明らかになった。戦争は、戦場に行っていなかった人間の心にも狂気を生み出した。

以下、上記「研究の方法」に即して「蝮のすえ」の研究成果を述べる。

- ① 辛島の力は権力を掴みとることであると辛島が自ら述べている。辛島は日本軍国主義を利用し、権力を凌駕する勇ましさを持っている。辛島にとって日本精神は、戦争中、自分が生きるための手段に過ぎない。そのため、戦後日本精神が自身の命を脅かすものになった途端、思い切って日本精神を捨てることにしたのである。辛島が唯一信じているのは、「俺自身の力」であり、この力は「権力をつかみ取ったその力」であると辛島は述べている。
- ② 泰淳が書いた楊樹浦は、「かつて陸軍の集積した屑鉄が今でも山と積まれていた。赤さびた鉄条網もはりめぐらしてあった」のように鉄の網に囲まれた空間が不気味な雰囲気漂せる。以前権力をつかんだ辛島が陸軍によって作られた鉄条網の空間で殺されるのは、仏教の「因果応報」と言っても良いだろう。自分が戦犯として処刑されても、自分のような人種は、日本だけではなく、南洋、フランスにもまだ出てくると預言者のように指摘した。杉のようなインテリは、辛島のような掴みとる権力者の行方に何も影響を与えられないどころか、権力の元に生きていくしかない日本のインテリを嘲笑していると考えられる。
- ③ 戦中、杉は日本軍国主義に支配されていたことを憎みつつも、日本軍国主義の権力に守られて上海で生きていた。戦後、杉のようなインテリは、辛島のような掴みとる権力者の行方に何も影響を与えられないどころか、権力の元に生きていくしかない。戦争指導者に対して日本人国民が何もできないという泰淳の無力感が窺える。
- ④ 杉の戦争責任に対する認識の在り方は、小説の中で触れていない。日本居留民の杉は戦争責任に対する認識が薄弱であることが明らかであろう。戦争中から敗戦まで、インテリを含めた日本の国民は(誰に)騙されていたため、戦争責任を自分のものとする意識が欠落していたと言える。同時に、インテリは、日本または世界のどの国においても社会の良心であるはずだが、権力を掴みとる人間に対する泰淳の無力感を見落とすことができない。

〈今後の展望〉

以上が、本年度の研究成果である。本研究を通して、敗戦直後、泰淳が戦争体験を踏まえて書いた小説に現れる戦争責任に対する認識を明らかにしてきた。泰淳の戦争体験は、兵士として戦争に参加したこと、上海で中日文化協会附属東方文化編訳館の出版主任として働いたことに分けられる。

古林尚が「侵略である日本軍の占領政策の片棒をかついで、〈国威宣揚〉〈思想善導〉の成果を挙げることが任務であった。転向者の泰淳にとっては、屈辱感にまみれた」と評している。兵士としての体験を踏まえたうえで書かれた「審判」、「汝の母！」から戦争の残酷さを読み取ることができる。

一方、中日文化協会に働く経験を書いた「蝮のすえ」等の小説は、どのような泰淳の戦争認識が窺えるのかを分析していくことが今後の課題である。泰淳も「政治と文学」に「戦争に負けなければぼくは小説を書かなかったろうし、小説を書くつもりにならなけりゃ、「蝮のすえ」以後の小説っていうのは出てこなかったんじゃないかと思うね」と書いた。

泰淳の軍の宣伝部（権力）、日本文学報国会（文学）との関係を考察し、明らかにしていくことで泰淳の戦争認識をさらに深く理解できると考えられる。「蝮のすえ」（1947）を深く理解することは、20年後に書かれた「富士」（1969）に関する研究の土台にもなると考えられる。

3. 成果発表（投稿中も含む）

研究経過・研究によって得られた成果を発表した①～②について、該当するものを記入してください。ない場合は「なし」と記入してください。

① 雑誌論文、図書（著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ）

② 学会・シンポジウム等での発表（会名、開催日、開催場所）

学会・シンポジウム等での発表

① なし

② 李娜娜 「『蝮のすえ』再論—文学者と戦争責任を中心に—」

日本女子大学国語国文学会 2017年12月2日 日本女子大学 目白キャンパス

※この報告書はホームページで公表されます。

採択者氏名

李娜娜

日本女子大学大学院学生特別研究奨励金 成果報告書

2018年 4月 3日

期 間	2017年度(29年度)	配分額	400,000円
よみがな	えびな めぐみ		
氏 名	海老名 恵	在籍研究科・ 専攻・学年	文学研究科・ 英文学専攻・博士課程後期3年
指導教員の 氏 名	川端 康雄	指導教員の 所属学科・職	文学部英文学科教授
研究課題名 ※40字以内	ダンテ・ゲイブリエル・ロセッティの前衛性について：詩人・画家としての観点から		

1. 研究成果の概要

当該研究の概要を400字程度で簡潔に記述してください。(様式変更・追加不可。以下同様)

ダンテ・ゲイブリエル・ロセッティはイタリア系移民の子としてロンドンで生まれた。今年度はロセッティの前衛性について考察するにあたりイタリア美術・文学の影響について調査するために7月19日から7月27日までイタリアに滞在し、ローマ、フィレンツェ、パドヴァ、ヴェネツィアにて現地調査を行った。ロセッティが偉大な画家として度々言及しているG・ベリーニ、ジョルジョーネ、ティツィアーノ、ティントレット等の作品を実際に鑑賞し、細かな筆致まで確認することができた。ヴェネツィア派の影響を色濃く受けた女性の半身像を描いた絵画作品 *The Blessed Damozel* と同題名の詩をとりあげた論文を執筆し、本学の紀要に投稿した。また、11月には大学院英文学専攻課程協議会第51回研究発表会にてロセッティの描く娼婦像についての研究発表を行った。これらの調査研究によってロセッティの前衛性にはイタリア美術や文学が大きな影響を与えていることが確認できた。今後の博士論文執筆に際し、イタリアの影響についても論じていく予定である

2. 今年度の研究報告

図表も含めてよいので、以下の①～③についてわかりやすく記述してください。

- ① 研究の目的
- ② 研究の方法
- ③ 研究成果・今後の展望

① 研究の目的

ロセッティの前衛性について様々な角度から分析を行うものである。1848年のラファエル前派兄弟団結成に始まり機関紙 *The Germ* の発行、労働者大学における素描指導、後期ラファエル前派と呼ばれるウィリアム・モリスやバーン＝ジョーンズとの共同作業などロセッティが生涯にわたって行ってきた様々な活動を通して前衛性を探る。今年度は特にイタリア系移民の子としてのアイデンティティに着目した。家庭の中では、イタリア語を話し、イタリアからの政治亡命者らが頻りに出入りする家庭環境が独自の価値観を生み出し、さらにダンテ研究者であった父親ガブリエーレ・ロセッティとイタリア系移民の娘であった母親フランチェスとの間に生まれたロセッティはイタリアの影響を避けて通れない環境に身を置いていた。常に時代の一步先を見据えていたといえるロセッティであったがその前衛性には、家庭環境やイタリア美術・文学の受容が大きく影響している事実を明らかにすることが研究の目的である。

② 研究の方法

ロセッティの各方面での活動に関しては、ラファエル前派関連の資料を中心に考察する。特に研究雑誌 *The Journal of Pre-Raphaelite Studies* から関連のある論文を選び読み込んだ。1860年代以降は、ヴェネツィア派の影響を受けた絵画作品を作成し、「ヴェネツィア派風の時代」と呼ばれている。イタリア美術の変遷について見取り図を得るためイタリアで現地調査を行った。ローマのボルゲーゼ美術館、ヴァチカンのシスティーナ礼拝堂、ラファエロの間を見学し、「ラファエロ以前」に立ち戻りその美術に学ぶという信念のもとに1848年に結成されたラファエル前派が求めた画風を探った。ロセッティがヴェネツィア派絵画に最初に関心を抱いたのは、ヴェロネーゼの作品を見てからだと言われている。そのためヴェネツィアのアカデミア美術館にて『レヴィ家の饗宴』『レパントの海戦』を観察し、ロセッティ作品の構図との類似性について確認した。G・ベリーニ、ジョルジョーネ、ティツィアーノ、ティントレット等の作品を鑑賞することで線描写よりも色彩を重んじたヴェネツィア派絵画の特徴を実際に確認する。ティツィアーノの『フローラ』は肉感的な女性の半身像がロセッティの描く女性像との関連性で度々取り上げられる作品であるためフィレンツェのウフィツィ美術館で作品を鑑賞し、豊かな髪の毛の流れ、肌の質感や輝きを観察する。現地調査を終え、イタリア美術の変遷とロセッティのイタリア受容についてまとめる。

今年度の研究報告（つづき）

③ 研究成果・今後の展望

<研究成果>

大学院学生特別研究奨励金を使用し、7月19日から7月27までイタリアにて現地調査を行った。ロセッティが偉大な画家として言及しているG・ベリーニ、ジョルジョーネ、ティツィアーノ、ティントレット、ヴェロネーゼのティツィア作品を実際に見ることができ、ヴェネツィア派の構図や色彩がロセッティの1860年代以降の作品に大きな影響を与えていることが確認できた。女性の半身像を描いた絵画作品 *The Blessed Damozel* では、流れるような髪や衣服、艶やかな肌、人物の手前には手すりを、背後には花々を描いておりヴェネツィア派の影響が色濃くみられる。この作品はプレデッラと呼ばれる祭壇画の様式がとられており上部の女性像と下部の男性が横たわる風景から成っている。イタリア各地の美術館や教会でこの様式を採用した多くの祭壇画がみられた。画風、様式の両面からイタリア美術の影響がうかがえる。またこの作品には基となった同題名の長詩があり「祝福される乙女」という意味のイタリア語 “The Blessed Damozel” と題名がつけられている。詩の中においては、ダンテの神曲を彷彿とさせる表現がみられる。この2つの作品をとりあげ、「ダンテ・ゲイブリエル・ロセッティの作品における二重性—詩と絵画『天つ乙女』から—」(『日本女子大学大学院文学研究科紀要』第24号、2018年3月、pp.57-66) としてまとめ、掲載された。

また、ロセッティの描く娼婦像についての考察をおこなった。詩作品 “Jenny” の中でヴィーナスやダナエといったギリシア・ローマの女神がシンボルとして使われ、その表現は、ティツィアーノの『ダナエ』を想起させるものでありロセッティが文学作品においてもイタリア文化の影響を受けていることがみてとれた。ロセッティは、独自の解釈で娼婦に様々なイメージを与え作品を創作している。この内容については、「Dante Gabriel Rossetti の娼婦に対するまなざし— “Jenny” と “Found” の分析から」として、大学院英文学専攻課程協議会第51回研究発表会で発表した。(2017年11月25日、立教大学池袋キャンパス)

<今後の展望>

今後は、博士論文の執筆作業に向け大まかな筋立てをしていく予定である。今年度は主にロセッティのイタリア受容について研究を行ってきたが、ヴェネツィア派の流れを汲む画風—主題をもたない感覚に訴える作品—がのちの唯美主義に繋がっていくことも明らかにしていきたい。芸術の新しい潮流が起こるときにはキーパーソンとしてロセッティが存在しており、そのことは彼が常に前衛的であったということに他ならないと考える。

イタリア現地調査では、日程の都合上、文学作品に関する資料収集が予定通りにできなかった。そのためロセッティのイタリア語翻訳作品『イタリア古詩人』やダンテ作品の翻訳『新生』について先行研究を踏まえながら作品研究を進めたい。

また、これまでに調査ができていなかったパトロンについてもその背景や価値観、作品注文に関する資料等にあたっていきたい。ロセッティの作品を認めていたパトロンたちの存在はロセッティの前衛性を語る上では欠かせないものとする。幅広い交友関係を持つロセッティであったため様々な分野の人々との交流もまた彼の作品や生活スタイルなどに影響を与えていることを明らかにしていきたい。

文学、絵画作品の分析を中心に据えながらも、様々な視点からロセッティという人物を考察し、「前衛性」ということについて研究していきたいと考えている。

3. 成果発表（投稿中も含む）

研究経過・研究によって得られた成果を発表した①～②について、該当するものを記入してください。ない場合は「なし」と記入してください。

① 雑誌論文、図書（著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ）

② 学会・シンポジウム等での発表（会名、開催日、開催場所）

① 海老名恵、「ダンテ・ゲイブリエル・ロセッティの作品における二重性—詩と絵画『天つ乙女』から—」『日本女子大学大学院文学研究科紀要』第24号、2018年3月、pp.57-66

② 海老名恵、「Dante Gabriel Rossetti の娼婦に対するまなざし— “Jenny” と “Found” の分析から」大学院英文学専攻課程協議会第51回研究発表会、2017年11月25日、立教大学池袋キャンパス

※この報告書はホームページで公表されます。

採択者氏名

海老名 恵

日本女子大学大学院学生特別研究奨励金 成果報告書

2018 年 3 月 28 日

期 間	2017年度(29年度)	配分額	309,000 円
よみがな	にしがい まき	在籍研究科・ 専攻・学年	文学研究科・ 英文学専攻・3 年
氏 名	西貝 真紀		
指導教員の 氏 名	大場 昌子	指導教員の 所属学科・職	英文学科教授
研究課題名 ※40字以内	J.D.Salinger と Jack Kerouac : 〈脱出する青年〉のモチーフとその受容		

1. 研究成果の概要

当該研究の概要を 400 字程度で簡潔に記述してください。(様式変更・追加不可。以下同様)

本研究においては、J. D. Salinger の『ライ麦畑でつかまえて』(*The Catcher in the Rye*) (1951) を中心に、〈脱出する青年〉のイメージに注目し、その描かれ方、そしてそのイメージを統括する物語の枠組みそのものが、Salinger が傾倒した禅仏教の影響を色濃く反映し、1950 年代に特有のイデオロギー (ex. 全体主義や順応主義) を批判する役割を担っていることを明らかにした。

〈脱出する青年〉という、日常から非日常へと移行し、再び日常へ戻るというイメージは、禅仏教における『十牛図』に登場する牛飼いの青年 (= 禅の修行僧) を彷彿とさせる。さらに、牛飼いの青年が辿る道筋は、ホールデンのそれと多くの点で類似性が認められる。以上を考察した結果、本研究において、*The Catcher* における〈脱出する青年〉のイメージは禅仏教からその着想を得ているものと結論付けた。

2. 今年度の研究報告

図表も含めてよいので、以下の①～③についてわかりやすく記述してください。

- ① 研究の目的
- ② 研究の方法
- ③ 研究成果・今後の展望

①研究の目的

今年度は、『ライ麦畑でつかまえて』(*The Catcher in the Rye*) (1951) と『オン・ザ・ロード』(*On the Road*) (1957) において、〈脱出する青年〉という共通の人物像が設定されていることに注目し、それらの描かれ方や同じ一人称の語り、どのような効果を狙って読者に提供され、それによって強調された〈個の声/意識〉が、作品のバックグラウンドとして設定された 1950 年代アメリカの全体主義的空間において、どのようにしてポリティカルな声/意識へと転換されていくのか検証することを目的に研究を進めた。作家らは、場所から場所への移動の軌跡をその風景の移ろいと共に精緻に描き出しているが、その動線のなかで登場人物たちが獲得するものは思考の自由であり、またそれは一つの集団に留まっていたときには得られない体験として、〈移動すること=脱出すること〉の意味を肯定的に示していく。本研究においては、双方の作家の文学テキストから浮かび上がる、アメリカ社会に留まることの〈精神的不自由〉とは何かを探り、さらに併せて、これらのテキストに対する当時の読者の反応を調査することで、作品が現実社会へと与えたインパクトの実体を明らかにすることを目標とした。

②研究の方法

今年度は、まず研究の中心となる作品を『ライ麦畑でつかまえて』(*The Catcher in the Rye*) (1951) と『オン・ザ・ロード』(*On the Road*) (1957) の二作品とし、J. D. Salinger 及び Jack Kerouac の〈脱出する青年〉というモチーフが出版された 1950 年代当時、どのような熱狂を持って迎えられ、解釈されていたのか、また、両作家が傾倒していた禅仏教思想を中心とする〈東洋的精神〉がどのように表出しているのか、それとは対極のアメリカン・ウェイ・オブ・ライフというイデオロギーの諸相を精査しつつ分析することを試みた。

今年度の研究報告（つづき）

③研究成果・今後の展望

まずは、*The Catcher in the Rye*の主人公ホールデン・コールフィールドに充てられた〈脱出する青年〉というモチーフについて、Salingerが日常から非日常へと移行し、再び日常へ戻るというプロットにおいて、場所から場所への物理的な移動を重要な動作として取り入れている点について考察した。移動の最中、一人称の語り手であるホールデンの思考は、過去・現在・未来へと自在に様々な時間の層を出入りする。移動によって主体を取り巻く空間が拡張され、流動的になるにつれて、主人公はアメリカン・ウェイ・オブ・ライフというイデオロギーがもたらす閉鎖的な枠組みから解放される。物語において、ホールデンは元いた場所へと戻り、つまりは往還によって終わりを迎えるのだが、移動・ある点からの脱出という経験によって、所謂社会的成功＝物質的豊かさの享受とは対極の、内面的体験を得ることになる。以上のような主人公が自己の内面へと意識を降下させていく物語構成は、設定された1950年代という時代背景を鑑みたとき、作家のオリジナリティを示すというよりは、むしろ〈東洋的精神〉の輸入と考えるべきであるが、一方で〈移動・脱出〉という動作を〈東洋的精神〉を発露させる、まさに乗り物としたところに、*The Catcher*が熱狂的な読者を獲得する理由ではないかと結論付けた。

併せて、上記で述べた*The Catcher*のプロットが、禅仏教において〈悟り〉の過程を描いたとされる『十牛図』のプロットと多くの類似性を有していることに注目し、研究を進めた。先行研究において、*The Catcher*と〈禅〉の関係は、主にホールデンが対立するインチキたちと和解する最後の場面を、禅における自他不二の考えの発露として捉え、限定的に分析するものに限られていた。しかし、物語全体を俯瞰したとき、ホールデンは『十牛図』に登場する牛飼いの青年＝禅の修行者と同じ役割を担い、物語の最初から〈禅〉を体現している。牛飼いの青年が放浪し、その過程で10の精神的変化の段階を経て真の自己、つまりは二項対立を超越した意識に到達するように、ホールデンもまた段階的に、インチキたちとの対立を克服し、禅的な精神的成熟に達するのである。このような『十牛図』と*The Catcher*のプロットの類似性を考えたとき、そこに意味されるものは、1950年代アメリカにおける成熟の意味、つまりは順応主義（David Reisman曰く1950年代アメリカにおける「他者指向型」の集団に顕著な傾向である）への批判であると本研究において結論付けた。

今後の展望としては、Salingerに加えて、本年度着手する予定だったJack Kerouacの『オン・ザ・ロード』（*On the Road*）（1957）に注目し、アメリカン・ウェイ・オブ・ライフの只中を生きた作家たちの伝記的事実を包括的に分析しながら、東洋思想を取り込むことで異分子となり、そうすることによって物質的な豊かさ・消費文化が生み出す価値観への抵抗を示し、損なわれた精神性の復権をなそうとした作家たちが、政治的共同体に対抗しうる文学的共同体を形成した意義を見出すことを目標としていきたい。さらに、その文学的共同体に対して、1950年代当時の読者がどのような反応を返し、作品を解釈していったのかについて、出版当時の雑誌、新聞記事などを精査することによって分析を進めていき、また可能な限り、今現在における受容の在り方についても調査し、1950年代当時との比較を通して、作品解釈における普遍性と時代経過による変容について分析を行い、その差異が持つ意味について考えていきたい。

3. 成果発表（投稿中も含む）

研究経過・研究によって得られた成果を発表した①～②について、該当するものを記入してください。ない場合は「なし」と記入してください。

①雑誌論文、図書（著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ）

②学会・シンポジウム等での発表（会名、開催日、開催場所）

①西貝真紀、『上書きされる主体の意味：冷戦物語としての「バナナフィッシュにうってつけの日」、「シーモア一章」』、日本女子大学大学院文学研究科紀要、第24号、2017、p. 93-104

※この報告書はホームページで公表されます。

採択者氏名

西貝真紀

日本女子大学大学院学生特別研究奨励金 成果報告書

2018年 4月 3日

期 間	2017年度(29年度)	配分額	316,000円
よみがな	いのうえ あさ		
氏 名	井上 亜紗	在籍研究科・ 専攻・学年	文学研究科・ 英文学専攻・博士課程後期2年
指導教員の 氏 名	大場 昌子	指 導 教 員 の 所属学科・職	文学部英文学科・教授
研究課題名 ※40字以内	ソール・ベロー文学における記憶の問題		

1. 研究成果の概要

当該研究の概要を400字程度で簡潔に記述してください。(様式変更・追加不可。以下同様)

ソール・ベローの小説は、語り手の回想形式を中心としており、語りの技法として記憶は重要な意義を持つが、それだけでなく、記憶は物語をけん引する原動力でもある。そのことを示すため、作品に見られる記憶の表象の考察を試みた。具体的には、記憶をめぐる問題意識を記憶研究の知見に照らすべく、ドイツで行われた記憶研究フォーラムに参加し、記憶と社会生活とを接続する議論に示唆を得た。そして、その成果として行った学会発表では、ベローが出版した第一作目の小説に、記憶への依拠への目覚めが描かれていたことを明らかにした。第一作目 *Dangling Man* を、主人公の鋭い聴覚が捉える空間に注目して考察を進め、最終的には記憶へとつながる議論を展開したものである。これによって前年度の研究成果に引き続き、記憶が空間のうちに表象される構造を確認することができた。また、これまでベロー研究では顧みられてこなかった聴覚のはたらきを発見したこともまた大きな成果である。

2. 今年度の研究報告

図表も含めてよいので、以下の①～③についてわかりやすく記述してください。

- ① 研究の目的
- ② 研究の方法
- ③ 研究成果・今後の展望

① 研究の目的

本研究の目的は、アメリカの作家ソール・ベロー (Saul Bellow, 1915-2005) の小説に見られる「記憶」の表象を読み解き、その文学的意義を明らかにすることにある。ベローは、およそ60年のキャリアを通して、主に語り手による自伝的回想形式小説を書き続けた。このようなベロー文学における「記憶」への依拠の大きさに着目し、本研究は、「記憶」がベロー小説の語りの技法として用いられているだけでなく、物語をけん引する力をも担っていることを示すものである。各々のテキストに表れている「記憶」の表象の変化を辿ることで、アメリカに渡った移民やその子どもたちが抱える伝統の受容・継承に対する様々な葛藤を読み取りつつ、同時に、各作品の主題とスタイルの相互作用を検証し、大局的にはベロー文学から見出すことのできる「記憶」のもつ多様な可能性をさぐることを企図している。

② 研究の方法

ベロー文学に表れている「記憶」の表象を考察し、小説の形式と主題との相互作用を明らかにするため、まず、本研究の問題意識をこれまでの記憶研究の知見に照らしてみる必要がある。したがって、最新の記憶研究に関する資料収集が不可欠である。9月にドイツのフランクフルトのゲーテ大学で記憶研究フォーラムが開かれたため参加した。コンスタンツ大学のアライダ・アスマン (Aleida Assman)、コロンビア大学のアンドレ・ヒュイッセン (Andreas Huyssen)、キングス・カレッジのアンナ・リーディング (Anna Reading) という記憶研究をリードする研究者たちによる講演もあり、最新の記憶研究の動向および重要な論点について理解を深める機会となった。世界各地から記憶研究を進めている研究者たちが集う場で、比較文学、社会学、環境学など学際的な視点に触れて、多いに刺激を受けた。

また、ユダヤ系アメリカ人であるベローが執筆活動を開始した時期と、ホロコーストやイスラエル建国の時期が重なっていることから、ベロー文学における「記憶」とユダヤ性との関係についても注意を払う必要がある。ドイツはナチスやホロコーストなどの歴史を抱えていることから、記憶の保存あるいは忘却の是非をめぐる研究が盛んであり、それは各地にある博物館の展示にも表れている。ベローも訪れた強制収容所跡地などの視覚資料は、ベローがホロコーストを扱った作品研究に生かされることになる。

今年度の研究報告（つづき）

③ 研究成果・今後の展望

【研究成果】

記憶研究フォーラムでの記憶研究における学際的で多彩な視点に触れたことで、「記憶」をより多角的に捉える示唆を得た。とくに「記憶」と、ミハイル・バフチン（Mikhail Bakhtin）やアルジュン・アパデュライ（Arjun Appadurai）らが注目した「社会生活（Social Life）」との関係をめぐる議論は、ペローの第一作目の長編小説である *Dangling Man* (1944) についての考察を進める助けとなった。ペローの小説については、中期作品から後期作品では、主人公にとっての「記憶」の重要性が前景化されている一方で、初期の作品に関しては、「記憶」の位置づけは一見明確ではない。しかし、「記憶」と無関係に見える主人公の社会生活に目を向けることで、逆説的に「記憶」の重要性への目覚めの瞬間をとらえることができた。すなわち、主人公 *Dangling Man* の部屋に焦点を合わせて考察することで、「記憶」の重要性の発見へと展開する過程を浮き彫りにしたものである。ペローの第一作目において、既に「記憶」が語りの技法であるだけでなく、自己を開放し困難を克服するための拠り所として据えられていることを示したと言える。

この研究成果をまとめ、『*Dangling Man* の部屋—聴覚空間から記憶空間へ』と題した発表を3月のユダヤ系作家研究会で行った。前年度の発表（標題：“The Narrator as Therapist: Narrative Therapy in Saul Bellow’s *Herzog*”）で扱った *Herzog* (1964) においても、「記憶」と空間が分かち難く結び付いていたことを確認したが、今年度の発表を通して、「記憶」と空間の結びつきをあらためて実感した。また、ペロー小説ではこれまで先行研究でも注目されてこなかった主人公の鋭い聴覚を発見したことも大きな収穫であった。

【今後の展望】

引き続き、今後もペローの他の作品における「記憶」の表象を読み解く作業を進める。ペローのキャリア全体を把握するため、具体的には、*Henderson the Rain King* (1959) と、*The Dean’s December* (1982) と、ペロー最後の小説 *Ravelstein* (2000) を中心に扱う。とくに、これまでの研究の成果として得られた空間と聴覚の重要性に注目して「記憶」を考察することによって、ペローの小説全体の変遷を俯瞰することができるもの期待している。そのため、一つ一つの鍵語の理解を深めなければならない。

記憶研究に関しては、ポール・リクール（Paul Ricoeur）などの論考を読み進める。昨年、アン・ホワイトヘッド（Anne Whitehead）の『記憶をめぐる人文学』（*Memory*）が翻訳され、訳者の三村尚央のあとがきも含めて充実しており、難解な記憶研究を概観するにあたって大いに助けとなる。また、ペローは自伝的な内容を組み込んでいることから、伝記や手紙などの調査も引き続き行いたい。シカゴ大学の図書館でのペローに関する文書の整理も終わり、多くが公開されたことで、アクセスしやすい状況にある。丁寧に読み進めたい。

空間については、「記憶の蓄積／痕跡」あるいは「記憶の場」としてはもちろん、「環境」や「時代」という空間にも目を向ける。ペローの小説には、地質学や環境問題への言及も見られるため、ユージン・ストーマー（Eugene Stoermer）やパウル・クルツェン（Paul Crutzen）などが用いた「アントロポセン（Anthropocene）」について理解を深める。

聴覚については、音と声とを定義する必要がある。バフチンの主張したポリフォニーのほか、音響メディアの発達の影響も考慮に入れながら、議論の焦点化を図りたい。

3. 成果発表（投稿中も含む）

研究経過・研究によって得られた成果を発表した①～②について、該当するものを記入してください。ない場合は「なし」と記入してください。

①雑誌論文、図書（著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ）

②学会・シンポジウム等での発表（会名、開催日、開催場所）

● 学会発表

発表者名：井上亜紗

発表標題：Dangling Man の部屋—聴覚空間から記憶空間へ—

学会等名：ユダヤ系作家研究会第30回講演会

発表年月日：2017年3月24日

発表場所：ノートルダム清心女子大学

※この報告書はホームページで公表されます。

採択者氏名

井上 亜紗

日本女子大学大学院学生特別研究奨励金 成果報告書

2018年 3月 31日

期 間	2017年度(29年度)	配分額	316,000円
よみがな	さくらだ れいか	在籍研究科・ 専攻・学年	文学研究科・ 英文学専攻・博士課程後期2年
氏 名	櫻田 怜佳		
指導教員の 氏 名	藤井 洋子先生	指導教員の 所属学科・職	文学部英文学科・教授
研究課題名 ※40字以内	日本語・英語パブリック・スピーチにおける「語りの文化差」の考察		

1. 研究成果の概要

当該研究の概要を400字程度で簡潔に記述してください。(様式変更・追加不可。以下同様)

本研究は、TED Talks というパブリック・スピーチの映像をデータとして用い、構成と言語表現を見る2つの観点から、英語母語話者と日本語母語話者はどのような語りを行っているのかを分析し、各言語話者の TED Talks における語りの様相を明らかにすることを目的としている。今年度は特に、パブリック・スピーチにおいて語り手は専門的知識を有し、聴衆は知識を共有していないという立場の差に着目し、各言語話者は、聴衆との知識量や立場の違いをどのように捉えていて、それがどのようにスピーチの語りに反映されているのかを観察し、分析した。分析の結果、英語母語話者と日本語母語話者の語りの構成と言語表現にはそれぞれに特徴が見られ、この相違には、語り手が聴衆と「共通基盤」を形成する方法の違いが起因していると考えた。この研究の成果について、今年度は国内外の5つの学会で研究発表を行った。

2. 今年度の研究報告

図表も含めてよいので、以下の①～③についてわかりやすく記述してください。

- ① 研究の目的
- ② 研究の方法
- ③ 研究成果・今後の展望

①研究の目的

本研究は、英語母語話者と日本語母語話者がそれぞれの母語で行うパブリック・スピーチをデータとして用い、スピーチにおける構成と言語表現を分析することによって、各言語話者がどのような語りを行っているかを明らかにすることを目的とする。言語文化によって「好まれる話し方 (fashion of speaking)」が異なるということは、多くの先行研究で論及されてきたが、パブリック・スピーチのように1人の語り手が多数の聴衆を相手に行う語りを分析する異言語比較研究は未だ少ない。パブリック・スピーチが日常会話と大きく異なる点は、語り手にとって聴衆は初対面で背景知識を共有していない相手であるということである。語り手は、自分の主張や経験を、それらを共有していない相手に伝えたいとき、知識や立場の差をどのように捉え、どのような語りを行っているのだろうか。本研究では、「広める価値のあるアイデア」を語るという条件 (TED Talks のスローガン) のもとに行われているパブリック・スピーチを観察し、同一の条件でありながら英語母語話者と日本語母語話者の語りに異なる傾向が見られるのは何故かということ进行分析し、考察する。

さらに、上記の比較研究により両言語話者が行うスピーチの在り方を理解した上で、現代の日本語母語話者は、日本語あるいは英語でスピーチを行う場面でどのような語りを行っているべきか (スピーチにおける語りには文化差があることを踏まえてどちらの言語の特徴を反映する語りを採用すべきか) ということを考え、日本の言語教育や英語教育におけるスピーチの指導に一案を示すことを最終的な目標としている。

②研究の方法

本研究で使用するデータは、“TED (Technology, Entertainment, Design) Talks”という、多様な分野の人々が「広める価値のあるアイデア」というスローガンのもとプレゼンテーションを行うスピーチイベントの映像である。アメリカ英語母語話者と日本語母語話者それぞれ12名のTEDスピーチを、(1)スピーチ全体の構成、(2)使用される言語表現を見る2つの観点から分析を行う。

今年度の研究報告（つづき）

③研究成果・今後の展望

〈今年度の研究成果〉

1. TED Talks の語りに見られる言語文化的特徴を明らかにする

英語母語話者と日本語母語話者がそれぞれの母語で行った TED Talks の語りにおける構成と言語表現を分析した結果、各言語話者の語りにはそれぞれに特徴があり、その相違には、語り手が聴衆と「共通基盤」を形成する方法の違いが起因していることが見出された。スピーチの内容について専門知識を有する語り手は、知識を共有していない聴衆に対して、問いかけのように相手を意識した発話をしたり、語り手自身の主観的評価を述べて自己開示をするなど、語り手と聴衆の共通基盤を形成する「基盤化」の作業を行っているといえる。その方法は、各言語文化によって異なっており、英語母語話者のスピーチでは、聴衆に情報の確実性を強調することによって基盤を構築する傾向が見られ、日本語母語話者のスピーチでは、語り手と聴衆の一体化や知識の共有化によって基盤を構築する傾向が見られた。今年度は、本研究により得られた、パブリック・スピーチにおいて語り手が行っていると考えられる聴衆との共通基盤の構築に貢献する言語的工夫について、国内外の学会（第1回共創学研究会、The 15th International Pragmatics Conference、共創学会第1回年次大会、JACET 談話行動研究会）にて研究発表を行った。先生方から多くのご助言を賜り、大きな示唆を得た。

2. 日本の英語教育におけるスピーチ（プレゼンテーション）の指導を考える

本研究の最終的な目標は、日本の言語教育や英語教育におけるパブリック・スピーチの在り方やその指導を考えることである。その足掛かりとして、今年度は、日本の大学英語教育におけるスピーチの指導に焦点を当て、神奈川県私立大学で行われている、英語によるプレゼンテーションの作成・発表を指導する授業において、学生はどのようなスピーチ（構成・言語表現）を行っており、さらに、スピーチを行う上でどのようなことに苦手意識や課題を抱えているかを観察し、分析した。この研究結果について、日本英語教育学会・日本教育言語学会第48回年次研究集会にて研究発表を行い、先生方より頂いたご指導やご助言から多くの学びを得た。

〈今後の展望〉

これまでは、英語母語話者と日本語母語話者の TED Talks における語りの構成と言語表現に焦点を当て、比較対照研究を行ってきたが、各言語話者のパブリック・スピーチの在り方をより緻密に分析し、詳細を明らかにするために、今後は、音韻的特徴（声質、強弱、イントネーション、リズム等）や非言語的要素（姿勢、ジェスチャー等）などにも注目して研究を行いたい。また、本研究では各言語12本ずつの TED Talks をデータとして使用しているが、より多様なジャンルの、より多数のデータを分析することで、英語母語話者と日本語母語話者が行うパブリック・スピーチの在り方を多層的に明らかにしていきたい。次年度は、2つの国際学会（5月に北海道大学で行われる ELSJ International Spring Forum 2018、6月にニュージーランド・オークランド大学で行われる Sociolinguistics Symposium 22）にて研究発表を行うことが決定している。

3. 成果発表（投稿中も含む）

研究経過・研究によって得られた成果を発表した①～②について、該当するものを記入してください。ない場合は「なし」と記入してください。

①雑誌論文、図書（著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ）

②学会・シンポジウム等での発表（会名、開催日、開催場所）

雑誌論文、図書

なし

学会・シンポジウム等での発表

- (1) 櫻田怜佳、『日本語パブリック・スピーチにおける共同構築のレトリック』、第1回共創学研究会、2017年6月4日、早稲田大学
- (2) 櫻田怜佳、“A comparative study of ways to communicate the ideas in TED Talks in American English and Japanese” The 15th International Pragmatics Conference (IPrA2017)、2017年7月20日、Belfast Waterfront Center, Belfast, Northern Ireland
- (3) 櫻田怜佳、『TED Talks において話し手が聞き手と共通基盤を構築する語りの方法—他者とのスキマをどのように扱うか—』共創学会第1回年次大会、2017年12月10日、早稲田大学
- (4) 櫻田怜佳、『英語プレゼンテーション指導における日本人学生の苦手意識への対応』、日本英語教育学会・日本教育言語学会第48回年次研究集会、2018年3月4日、早稲田大学
- (5) 櫻田怜佳、『パブリック・スピーチにおいて語り手はいかに聞き手と共通基盤を構築するか—英語母語話者と日本語母語話者の TED Talks における構成とことばの使用に着目して—』、JACET 談話行動研究会、2018年3月24日、早稲田大学

※この報告書はホームページで公表されます。

採択者氏名

櫻田 怜佳

日本女子大学大学院学生特別研究奨励金 成果報告書

2018 年 4 月 3 日

期 間	2017年度(29年度)	配分額	276,000 円
よみがな	すぎさき みき	在籍研究科・ 専攻・学年	文学 研究科・ 英文学専攻・博士後期課程2年
氏 名	杉崎 美生		
指導教員の 氏 名	藤井 洋子	指導教員の 所属学科・職	文学研究科・教授
研究課題名 ※40字以内	「なんか」の語用論的役割 -社会文化的コンテクストの観点から-		

1. 研究成果の概要

当該研究の概要を400字程度で簡潔に記述してください。(様式変更・追加不可。以下同様)

本研究では、これまで「不確かなものの提示」、「発話のつなぎ」、「和らげ」などの機能が指摘されてきた「なんか」という語を取り上げ、この語の談話上の働きをディスコースの中で検証し、コミュニケーションの観点からその働きを考察した。会話データを用いた分析の結果、「なんか」は、話し手が自らの経験について話す「自己開示場面」において頻繁に発話され、新情報を導きながら談話を駆動させる働きを担っていることが明らかになった。また、話し手は、心内発話、オノマトペ、第三者の発話の引用などの、臨場感あふれる表現を「なんか」と共に用いて、会話を展開させていく傾向が見られた。これらの表現は、事実そのまま、思慮分別を加えない経験そのままの状態を意味する「直接経験」(西田 2006)であり、「なんか」はこれらの表現を導き、発話内容への態度・認識を聞き手に示していく働きを担っていると結論付けた。

2. 今年度の研究報告

図表も含めてよいので、以下の①～③についてわかりやすく記述してください。

- ① 研究の目的
- ② 研究の方法
- ③ 研究成果・今後の展望

①研究の目的

会話において頻繁に発話される「なんか」という語の語用論的役割を、ディスコースの枠組みから分析し、この語が発話される時、話し手と聞き手のやりとりでどのような現象が生じているかを明らかにする。この語はこれまで、普段意識せずに自然と使われていることから、特に意味を持たない、発話の「間」を埋める語と捉えられてきた。しかし、その使用は多岐にわたり、実際の会話をコンテクストと共に分析し、その使用の根底にどのような働きがあるのかを知ることが重要であると考えた。本研究では、「なんか」が頻繁に用いられる理由を、日本語の持つ社会文化的なコンテクストの観点から、その働きと語用論的意味を考察する。

②研究の方法

データは、初対面の女性参加者たちによって収録された「ミスター・オー・コーパス」を使用した。これは二人組の女性参加者がこれまでの経験(「びっくりしたこと」)をテーマに語る話データである。対象データ数は日本語会話26例(先生・学生ペア13例、学生・学生ペア13例)であり、その全ての会話の中で「なんか」は、395例発話されていた。特に、「なんか」と共起する語や表現を抽出し、コンテクストと共に分析を行った。

昨年までの分析において、話し手はオノマトペや心内発話、第三者の発話の引用を「なんか」と共に使う傾向があることが明らかになってきた。そのため、それらの表現が多く見られる場面に着目し、特徴を観察した。その結果、「なんか」と共に使われる表現は、特に、話し手が自分自身のこと、つまり、自分自身が経験したことや感じたことについて話す「自己開示」の場面に多く見られることが明らかとなったため、そこで使用される「なんか」を取り上げ、その使用について、話し手が聞き手に伝えようとしていることは何か、やりとりの中で何が行われているのかという観点から、考察を行った。

今年度の研究報告（つづき）

③研究成果・今後の展望

自己開示場面において発話される「なんか」は、話し手が語りを進行させながら、新情報(Chafe 1994)を聞き手に伝えたいときに使われていた。その際、話し手は出来事を想起させ、「どのような表現で伝えるのがよいか」と思考しながら語るため、言いよどみや修復などの現象が特徴的に観察された。このことから「なんか」は、試行錯誤しながらも語りを進めていく場面において、談話を駆動させていく働きを持つことが明らかとなった。

また、話し手は自己開示場面において、その時の心の内を心内発話で表現するときや、出来事のイメージを伝えようとオノマトペを発話するとき、そして第三者の発話を引用するとき、頻繁に「なんか」を発話していた。心内発話は、話し手が自分の心の中で思ったことを直接話法で発話することによって、出来事に対する率直な感情や、感覚を表現するものである(阿部 1999)とされている。オノマトペは、話し手の経験の生き生きとした質感を呼び起こし、出来事を体験していない聞き手に、そのイメージを作り出すことを助けるという特徴があることが説明されている(Kita 1997)。さらに、第三者の発話を引用することは、他者のことばを報告することにとどまらず、皮肉や共感など、今話している話し手の表現態度を表すことが指摘されている(伊原 2017)。これらのことから、話し手はこれらの表現を用いて、経験したことや感じたことを、できるだけそのままの状態伝えようとする時に、「なんか」を発話していると考えられる。心内発話やオノマトペ、第三者の発話の引用は、話し手が直接経験したことを、そのとき感じたままに、聞き手に伝える表現形式と言え、このような表現は、事実そのまま、思慮分別を加えない経験そのままの状態を意味する「直接経験」(西田 2006)と考察することが出来る。「直接経験」は日本語の語り方として特徴的なものであることから、「なんか」は、この「直接経験」を導く働きをし、ありのままの経験や感覚を伝えながら、聞き手に対して自らの認識を示す働きを持つと結論付けた。

これらの研究成果を、本年度は、紀要論文にて発表した。また、国内外の学会に参加、発表を行い、様々な研究者の方々から研究内容について貴重な意見をいただくことができた。発表によって得られた指摘やコメントから、新たな視点も取り入れ、研究を進めていきたい。

3. 成果発表（投稿中も含む）

研究経過・研究によって得られた成果を発表した①～②について、該当するものを記入してください。ない場合は「なし」と記入してください。

①雑誌論文、図書（著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ）

②学会・シンポジウム等での発表（会名、開催日、開催場所）

①日本女子大学文学部紀要（杉崎美生「自己開示場面における「なんか」の即興性」2017, 24, 81-92）

②学会名：ELSJ International Spring Forum 2017

日時：2017年4月23日

会場：Meiji Gakuin University, Shirokane Campus, Tokyo, Japan

題目：On the Modality Expressed by the Japanese Particle *Nanka* in Spoken Discourse

学会名：International Pragmatics Association 15th International Pragmatics Conference

日時：2017年7月20日

会場：Belfast Waterfront Center, Belfast, Northern Ireland

題目：The Pragmatic Meaning of *Nanka* in Japanese Discourse

学会名：共創学会第1回年次大会

日時：2017年12月10日

会場：早稲田大学

題目：心内発話を伴う「なんか」の使用—自己開示場面からの考察—

学会名：日本語用論学会第20回大会

日時：2017年12月17日

会場：京都工芸繊維大学

題目：自己開示場面における「なんか」の使用—直接経験を導く働きに着目して—

学会名：第41回社会言語科学会

日時：2018年3月10日

会場：東洋大学

題目：話し手はどのように疑似独話を使うのか—談話進行場面に見られる「なんか」の使用から—(共同発表)

※この報告書はホームページで公表されます。

採択者氏名

杉崎 美生

日本女子大学大学院学生特別研究奨励金 成果報告書

2018年4月3日

期 間	2017年度(29年度)	配分額	92,000円
よみがな	おしだこうこ		
氏 名	押田 昊子	在籍研究科・ 専攻・学年	文学研究科・ 英文学専攻・博士課程後期1年
指導教員の 氏 名	三神和子教授	指導教員の 所属学科・職	文学部英文学科教授
研究課題名 ※40字以内	E.M. Forster (1879-1970) と Virginia Woolf (1882-1941) の作品における、個人と共同体の概念、その境界上の表現について		

1. 研究成果の概要

当該研究の概要を400字程度で簡潔に記述してください。(様式変更・追加不可。以下同様)

今年度研究対象としたのはヴァージニア・ウルフ(1882-1941)とE. M. フォースター(1879-1970)の作品であり、とくに両者において境界を示す表現があること、中間に位置する人物が表れることに焦点をあて、解釈を進めた。主軸としたのは研究計画に示したとおり、研究対象である両作家のテキストの精読と、関連する研究書の重点的な調査である。ここから得られた研究成果の概要をまとめる。各詳細は2.③にまとめた内容のとおりである。

まず、ウルフの作品において、布地という観点から境界の表現を解釈する意義を確認できたことである。次に、フォースターだけではなく、ウルフのフィクションにおいても、個人とコミュニティの関係性への意識を読み解く必要があると認識できたことである。最後に、ウルフの作品で批評的に用いられる衣服のはたらきについて、問題意識を新たにできたことである。

以上のように並行して行った研究の成果により、今後ウルフの作品における「布地」「衣服」のテーマに研究を集約していく展望を得たことが大きい。

2. 今年度の研究報告

図表も含めてよいので、以下の①～③についてわかりやすく記述してください。

- ① 研究の目的
- ② 研究の方法
- ③ 研究成果・今後の展望

①研究の目的

修士論文の研究内容をさらに深めかつ展開し、博士論文執筆へつなげることを見据えている。

今年度目的としたのは、モダニズムの作家であるヴァージニア・ウルフと、同時期に活動したE. M. フォースターの作品を比較検討し、両者の作品にみられる境界線上の表現(作中で暗示される二つの世界の行き来を可能にする「モチーフ」や、作中で対照的に示される集団の中間に位置するような「人物像」)に着目することである。具体的には次の2点にまとめられる。

- >ウルフ作品に関しては、モチーフに着目し、とくに「布地・衣服」のはたらきを読み解くこと
- >フォースター作品に関しては、個人の背景となる「コミュニティ」のイメージを調査すること

②研究の方法

研究方法は、両作家のテキストの精読に加え、先行研究を調査し、論文執筆に必要な箇所をまとめることを主とした。博士論文執筆を見据えとくに重点的に検討したのは、次の3点である。

- >モダニズム作品における「ordinary(日常性)」と「thing(もの)」を論じた研究の調査
At the Mercy of their Clothes (2017), *Virginia Woolf: the Patterns of Ordinary Experience* (2010), *Virginia Woolf: Fashion and Literary Modernity* (2006) を中心とした関連資料を調査した。
- >モダニズム作家と1920-30年代のイングランドの移行を論じた研究の調査
A Shrinking Island (2004)を中心に、イギリスのモダニズム文学自体が歴史的転換(帝国の「縮小」に伴う国内の緊密なコミュニティ構築の試み)と密接に関わっていることを学び、両作家の1930年代の小説執筆以外の活動(劇作、エッセイや評論、ラジオ放送における意見の発信)の背景を調査した。

>博士論文でとりあげる予定の作品の精読

ウルフの小説以外の作品を論文内に取りあげたいため、後期の作品にあたる *The Three Guineas* (1938) を精読した。これに加え、政治的側面やフェミニズムの動向といった観点を補う関連資料を参照した。

今年度の研究報告（つづき）

③研究成果・今後の展望

【研究成果】

「②研究方法」に準じて各成果をまとめる。そして以下の成果により、博士論文の構想につながる下地を築くことができた。現在はその前段階として本年（2018年）の研究誌に投稿する論文を執筆している。

>モダニズム作品における「ordinary（日常性）」と「thing（もの）」を論じた研究の調査

近年の論文を中心に調査し、「日常性」や「もの」という観点からウルフ作品を解釈する潮流が高まっていることを確認できた。このことにより、「布地」「衣服」のモチーフという観点からウルフの作品を読み解く意義が裏付けられたのは大きな成果である。そのため、現在執筆中の論文に反映させる予定である。

>モダニズム作家と1920-30年代のイングランドの移行を論じた研究の調査

主にフォースターのエッセイなどを読み解く鍵として、戦間期のイングランドのコミュニティ像を調査したが、フォースターだけではなく、やはりウルフのフィクションの作品の背景においても、イングランドという小コミュニティのイメージが横たわっていたと理解した。この点は今後研究対象としたいウルフの最晩年の作品 *The Years* (1937) や *Between the Acts* (1941) の登場人物の描写を解釈する上で踏まえるべき要素と考えられるため収穫であった。

>博士論文でとりあげる予定の作品の精読

The Three Guineas を精読したことにより、ウルフが主に男性を指して批評的に用いた「衣服」の記号的なはたらきについて、問題意識を新たにした。具体的には、フィクションにおける扱われ方の違いやジェンダーの観点から比較検討する必要があると感じたため、今後研究を深める上で重要な視点を得ることができたと考える。

【今後の展望】

以上の研究を並行して行ったことにより、今後ウルフの作品における「布地」「衣服」のテーマに研究を集約していく展望を得たことが大きい。次年度から、以下のようにウルフの作品と「布地」「衣服」についてより詳細な分析方法を探りたい。

>ひきつづき踏まえる研究方法

今年度行った精読という形から得られることが多かったため、ひきつづきテキストを中心に、関連する複数の資料を読み込む形をとりたいと実感した。また、二人の作家の比較を通じてモダニズムの文学に通底する問題をより深く考えることができたため、今後も比較対象とする作家を想定することは重要であると感じた。

>新たに必要となる研究方法

ウルフの作品における「布地」という観点について実地的に調査を行いたいため、イギリスで資料および展示を確認する出張が必要であると考え。とくに、ヴァージニア・ウルフの姉で画家であったバネッサ・ベル（1879-1961）は、ウルフの著作の装幀に携わり、テキスタイル・デザインも行っていたため、ぜひ今後の研究に取り入れたい。そのため、Sussex Charleston に残る家屋を訪れ、室内装飾などを実際に確認する予定である。

3. 成果発表（投稿中も含む）

研究経過・研究によって得られた成果を発表した①～②について、該当するものを記入してください。ない場合は「なし」と記入してください。

①雑誌論文、図書（著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ）

②学会・シンポジウム等での発表（会名、開催日、開催場所）

①なし

②なし

※この報告書はホームページで公表されます。

採択者氏名

押田 昊子